

現代レジャー論(3)

Aristotle のレジャー教育論をめぐって

——古典的レジャー観に学ぶもの——

松田 義幸

Aristotle's concept of leisure-education

——A study of classical view of leisure——

Yoshiyuki MATSUDA

Due to an entirely different social context in classical Greece, Aristotle's concept of leisure seems to have been misread in Japan, which in turn is one of the reasons for a lack of education to experience meaningful leisure. The present paper discusses the points of misunderstanding, and aims at a new and more suitable interpretation of Aristotle's philosophy. A. regarded leisure as 'a state of being, in which activity is performed for its own sake'.

Aristotle said that 'happiness should involve leisure'. Now, the time has come to realize the importance of leisure and to seek some ways for an education toward that goal in our own social context.

Key words : Aristotle, schole, leisure

I. はじめに

現代レジャーの概念に広がりや深さをもたせるために、レジャー研究者たちが、古代ギリシアの Aristotle, 古代ローマの Seneca の古典的レジャー観の読み直しを始めている。

1974年にアメリカの James F. Murphy は、*Concepts of Leisure-Philosophical Implications*¹²⁾を編集し、レジャーの価値について、形而上学的アプローチを行っている。その中で Classical Dimension of Leisure の章を設け、古代ギリシア、古代ローマのレジャー観がいかなるものであったか、Josef Pieper, Sebastian De Grazia の著作を参考に解説を与えている。

わが国においても、1971年に財団法人余暇開発センターが設立され、井上忠、稲垣良典、土居健郎、村上陽一郎、吉田夏彦、我妻洋、渡部昇一ら

が参加し、レジャーの原論についての研究を行っている¹⁷⁾。ここでも、Pieper, Grazia の著作は、高く評価されている。

このようにみえてくると、古典的レジャー観の読みなおしは、Pieper, Grazia から始まったといってもよいかもしれない。Pieper は、1948年に、*Muße und Kult* を著し¹⁴⁾、Aristotle のレジャー観に立ち帰ることの重要性を述べ、その後で、Pieper 自身のレジャー論を展開している。また Grazia は1962年に *Of Time, Work and Leisure*¹⁹⁾ を著し、その中で、The Background of Leisure の章を設け、Pieper よりも詳しく、Aristotle のレジャー観を取り上げ、平時におけるレジャー教育の重要性を指摘している。さらに Grazia は、古代ローマの Seneca のレジャー観を取り上げ、古代ギリシアから続いている二つの流

れ、仕事に力点をおくストア的態度とレジャーに力点をおくエピクロスの態度を、いかに調和させるかについて思いをめぐらしている。

今わが国は人生80年時代を迎え、これまでの労働を中心にしたリニア型人生から、労働、学習、レジャーを柔軟に選択できるリカレント型人生への転換が望まれている。そしてその受け皿として、学習社会がイメージされている。この新しい人間、新しい社会にリアリティをもたせるには、それを支える理論的根拠が必要である。この場合に、Pieper, Grazia, さらに古典的レジャー観の読みなおしが、非常に重要になってくるものと思われる。すでにその作業は若い研究者たちを中心に始まっているが、学習社会といわれる割には、わが国において教育学からの取り組みがまだ消極的のように思われる。というのは、今日の教育学が、まだ労働中心の生き方、社会のあり方の教育原理に基づいており、わが国の教育学は、この新しい人間、新しい社会の要請に、研究も教育も、大きく立ち遅れていると思われるからである。その原因は、教育原理が未だ前工業社会の「勤勉一節約」の価値観をベースにしており、リカレント型人生、学習社会に沿っていないからである。

そこで本論では、まず、わが国の教育学がレジャー問題と Aristotle のレジャー観をどのようにとらえてきたか、どこに問題があるのか、戦前、戦後、わが国教育、教育学研究に大きな影響を与えてきた石山脩平、梅根悟のレジャー理解、Aristotle 理解を検討しながら、探ってみたいと思う。そして、次に戦後、Aristotle のレジャー観が国内、国外でどのように見直されてきているか、紹介したいと思う。

なおはじめに取り上げる石山脩平は、古代ギリシア教育の権威として知られており、戦後の東京文理大学、東京教育大学の教育哲学を担当している。また梅根悟は同じ大学で、教育史を担当し、日教組の理論的指導者として知られている。

II. なぜわが国のレジャー教育が軽視されたか

石山は1952年に著した「西洋近代教育史」の中で、古代ギリシアのレジャー観について次のように述べている。

「アリストテレスによって、閑暇 (schole) を有する自由人の人間的教養が、生活の多忙 (ascholia) に追われる奴隷との対比において明示せ

られた。これらを通じて、人間性が豊かに高く調和的に発展させられ、文化の諸領域が後世永く仰がれるだけの精華を發揮したことは、たしかにヒューマンイズムのギリシア的頂点を示すものであり、ギリシア古典時代の名に値するものであった。しかし、その場合に第一には、少数の自由民だけが人間的教養を身につけて支配階級としての特権を握り、これに幾倍する奴隷は一本来人間的に劣等ではなく、ただ敗戦によって捕えられ、または貧窮に陥って買収せられた結果、自由民の農奴、家僕、童僕等とせられたものであるが、彼等の子孫は一身分的に自由民と差別せられてヒューマンイズムの恩恵はうけなかった。第二にギリシア民族は、自由民も奴隷もその属するポリスと対立抗争し、ギリシア民族としての自負心を抱きながらも、民族の大同団結には到達せず、いわんや異民族との融和結合を実現することはついに不可能であった。かくしてギリシア教育史におけるヒューマンイズムは、階級的制限とポリスの制限のもとにおけるヒューマンイズムであって、ここにギリシア教育史の精華の蔭に存する広大な暗黒面が指摘せられるのである。」¹¹⁾

長い引用になったが、ここに石山のギリシアのレジャー観がよく記述されていると思う。この中の二つの制限についても、筆者は批判を加えたいが、それは本文のねらいから離れるので、石山のレジャー観についてまず批判を加えたい。

Aristotle 「ニコマコス倫理学」中のレジャーに関して記述された箇所²⁰⁾²¹⁾の訳出を様々な文献でみると、

‘We occupy ourselves so that we may have leisure.’¹¹⁾

‘We are un leisur ely in order to have leisure.’¹⁵⁾

「我々は閑暇を持たんがために忙殺される。」⁸⁾となっている。また

‘We do business in order to have leisure.’⁹⁾

‘We work in order to have leisure.’¹⁰⁾

とあり、schole は英語では「レジャー」と訳出され、ascholia が「労働」と捉えられている。

この We <我々> は、市民を指しているわけで、<我々> には奴隷が入っていないことは明かである。<我々> という市民は、レジャーを享受しようとして、自らも働いていたのである。ところが、石山はここで、ギリシア語の ascholia は奴隷の担

当であったと述べている。もちろん、古代ギリシア社会は奴隷制を前提にしていたが、市民生活すべてがレジャー生活であったのではない。自らも働いていたのである。古代ギリシアでは、労役的労働には、ponosという言葉を使っていた。これは英語の labor にあたり、肉体的苦痛、汗をかく労働、肉休労働を意味していた。石山の Aristotle 理解はこのようにみえてくると、不十分であったといわざるをえない。そこで、石山が、1934年に著した名著「古代ギリシア教育史」まで遡って、Aristotle についての記述を調べてみると、すでにこの時点から、コンテクストを読み違えていることがわかる。

「アリストテレスによれば、生活には『多忙』のためのものと、『閑暇』のためのものがある。前者は戦のため、後者は平和のためであり、更に前者は『必須有用のもの』をめざし、後者は『美しきもの』をめざす。換言すれば、前者は自己一身の生計や国家の存立を保つための経済的並びに軍事的な生活であり、後者は平和と閑暇とを学問や芸術に送る生活である。前者はいわば、奴隷的生活であって、後者は自由人の生活である。而してアリストテレスによれば、戦は平和のためにあり、多忙は閑暇のためである。故に彼は自由人としての教養をより高く評価し、経済や軍事はそのための手段と考えたのである。スパルタの教育はこの点においては彼によって非難せられている。所謂自由教育本来の意義は生活の為の多忙を離れて、閑暇を美しく過ごす為の教育に存する。而して後世の所謂職業陶冶と一般陶冶に関する思想は、実にアリストテレスのこの思想に淵源するのである。」¹⁰⁾

この石山の記述の下敷になっている箇所は、Aristotle「政治学」第7巻、第8巻にみられる^{5)註2)}が、この箇所の Heineman-Harvard の訳出は、

Also life as a whole is divided into business and leisure, and war and peace and our actions are aimed some of them at things necessary and useful others at things noble. In these matters the same principle of preference that applies to the parts of the soul must apply also to the activities of those parts: war must be for the sake of peace, business for the sake of leisure, things necessary and useful for the purpose of things noble.⁶⁾

となっている。また岩波文庫の山本光雄訳では、

「また全体として生活も二つの部分、即ち事業と閑暇、戦争と平和に分けられている。そうして実践的活動のうちあるものは生活に必要で有用なものであり、またあるものは立派なものである。これらのものについても魂の部分やそれらの活動と同一の選択がなされなければならない。すなわち戦争は平和のために、事業は閑暇のために必要で有用なものは立派なもののためになければならない。」⁹⁾となっている。

Aristotle の「政治学」の第7巻、第8巻を読み込んでいけば、ascholia の生活は職業生活と軍事生活をさし、それが奴隷的生活をさすものでないことはすぐわかるはずである。なぜそのようにミスリードをすることになったのか、これまで、英語訳と日本語訳も、参考に取り上げてきたが、英語訳に比べ、日本語訳は、schole, ascholia の本来の意味を擱んでいないように思われる。英語訳では、schole に leisure があてられており、ascholia も business, occupy oneself, work としてとらえられている。ところが、日本語訳では schole が閑暇で、ascholia が多忙、忙殺、事業で、今日的意味での leisure と work の関係が浮かんでこない。わが国では、こうした紹介が長く続いてきたために、Aristotle のレジャー論をわかりにくくし、それが Aristotle のレジャー教育論の過小評価につながったものと思う。もっとも戦前の富国強兵の教育理論を要請されていた時代に、また戦後の唯物史観、民主主義の教育理論を要請されていた時代に、レジャー論、レジャー教育は、不要不急であった。従って Aristotle の世界を読み違えたとしても、いたしかたなかったともいえる。

梅根悟は、戦後、唯物史観の立場から、教育のあり方をとらえていたということもあって、Aristotle については、1955年に著した名著「世界教育史」の中で、僅か5行のコメントしか与えていない。

「アリストテレスの教育論は、その著『政治学』(Politica)にみられるが、それはほぼその師プラトンの受け売りである。彼は『青少年の教育は立法家の最大の関心事たるべきである』といて、国家による支配階級子弟の教育の管理と統制の必要を説いた。そして彼もまた、結婚と妊娠、出産の国家的統制の必要を説き、不具の子供及び、国家の人工計画によって定められた法定出産数をこ

えた育児は、処分されるべきであるとした」²¹⁾

これでは、梅根は Aristotle の scholae のための教育論、ascholia のための教育論を理解していなかったといわれても、いたしかたない。戦後、梅根は合科教育、コアカリキュラムの重要性を提起したが、それは労働と関わった教育であって、レジャーと関わった教育ではなかった。²²⁾

Aristotle は、幸福はレジャーにあるが、レジャーの能力を身につけていない人、レジャーの修養をつもうとしない人に、いくら自由時間が増えても、それは幸福につながらず、むしろ墮落すると考えていた。そこで ascholia 教育も大切であるが、それ以上に大切で、難しいのが scholae 教育であると考えていたのである。

人生80年をいかに充実して生きるか。それは人生80年の1割の労働時間と3割の自由時間をいかに充実して生きるかということである。このような時代を迎えると、教育は、職業教育とレジャー教育の両面からとらえなければならなくなってくる。そこで Aristotle のレジャー教育論が意味をもってくるのである。

III. Aristotle のレジャー教育論²⁴⁾

市民生活は大きくとらえると、労働とレジャー、戦争と平和の四つからなる。市民は労働と戦争のための能力を身につけなければならないが、しかし、それよりも大切なことはレジャーと平和をよりよく生きる能力を身につけることである。従って、教育で大切なことは、労働と戦争のための教育にくわえて、レジャーと平和のための教育を充実することである。市民が子供の時期にある時も、またそれ意外にある時も、レジャー教育は重視されるべきである。ところが一般によい政治をしているとの名声の高い国を例にとっても、労働と戦争のための教育に偏っており、レジャーと平和のための教育に力を入れていない場合が多い。しかし、こうした政治を行うと、スパルタの例にみるように、市民にレジャーと平和を生きる能力が欠如し、平和によってもたらされたレジャーを文化の基礎とすることができなくなってしまう。従って、政治で大切なことは、軍事をはじめとして、国の諸制度を作る時に、それがレジャーや平和のためになるように、配慮しておくことである。というのは、好戦的な国は戦争をしている時は、安全であるが、戦争に勝つと衰退してしまいやすい

からである。平和が続く、市民にレジャー能力をつけておけばよかったと思うときには、すでに遅すぎるのである。市民個人をとっても、国をとっても、レジャーを重視した目標、目的をたてることは、最も基本的なことである。というのは、戦争は平和のため、労働はレジャーのためという関係が成り立っているからである。もちろんそのためには、市民に徳が備わっていなければならない。労働には勇気と忍耐の徳が、レジャーには、知を愛し、知性に即して生きるという徳がなければならない。そして、自制心と正義はいつも大切な徳であるが、この徳も平和とレジャーの時に備わっていなければならない。なぜならば、戦争は人々に自制心と正義を強いるが、繁栄、平和、レジャーは人々のタガを緩め、遊楽生活にのめり込ませてしまうからである。従って、自己に規律を課して、生活のリズムを保つためにも、自制心と正義は、大切な徳である。

戦争と労働に従事している時に、いくら立派であっても、平和とレジャーにある時に、自制心と正義を忘れ、遊楽生活にふけるようでは、よい政治をしていることにはならない。それゆえ、バランスのとれた徳を身につけるためには、バランスのとれた教育がなされなければならない。

その教育はいかにあるべきか。大きくは二つに分かれる。生活に有用な能力を身につけるための教育とレジャーを享受する能力を身につける教育である。前者には、読み、書き、図画、体育、後者には音楽が入る。もちろん前者の教育によって、生活に有用な能力以上の能力を身につけることもできる。ここでレジャー教育としてまず音楽をあげると、音楽は単なる娯楽ではないかと批判をうけそうであるが、それにはそれなりの根拠がある。音楽はレジャー教育において、最も基本的なプログラムであるからである。音楽はレジャーを気高く生きる能力を育ててくれるからである。オリンポスのメロディーを聴き、燃えるような感動をし、それによって正しい喜びや愛の方法を身につけ、習慣にすることができる。ホメーロスは気高いレジャーの享受として、音楽を高く評価している。オデュッセイアーでは、宴の客人たちが、部屋中に順序正しく座して、楽人の歌を聞き入ることを一番の楽しみとしていた。古代ギリシアの伝統的な考え方に従えば、音楽はまさに文化と同義語であったのである。

さてこれまで Aristotle のレジャー教育論をみてきたが、Aristotle は、レジャーをもう一つ心の状態からとらえている。

IV. Aristotle のレジャー哲学について^{#5)}

Aristotle はレジャーの理想は、観想的な生活 (contemplative life) にあると考えていた。contemplation は、ラテン語の *contemplatio* からきているが、ギリシア語では *theoria* にあたる。contemplation としてのレジャーとは、労働や拘束から自由になった心の状態で、知性に即して生きることであり、その人がその人本来の自分になるための心の状態をさしている。

わが国では、contemplation に観想(もともとは仏教の言葉で、一般には、真理、実在を他の目的のためではなく、それ自体のために静かに眺めること)、観照(事の理を明かにすること)をあてている。

Aristotle のいう観想的な生活とは、それ自身が目的であって、それによって実利を期待しようというものではない。それ自身に固有の楽しみが含まれており、自足的で、労苦を伴うことが無い。したがって、それは人間にとって究極の幸福といってもよい。観想的な生活によって、自己のうちなる最高の価値を見出すことができるからである。

ところで、この観想的な生活のためには、ある程度の生活水準に達していることが前提になるけれども、それほど高い水準である必要はない。ソロン(ギリシア7賢人の一人、アテネの政治家、立法家、詩人)は、最も幸福な人として、平凡な市民をあげており、外見からみて、ほどほどの生活水準で、りっぱな行為、節度のある生活をおくることができると考えていた。また、アナクサゴラス(古代ギリシアの哲学者)は、幸福な人とは富や権力を持っている人ではないと考えていた。とかく人間を外見で評価しがちであるが、人の目に奇妙に映るような人の中に、えてして幸福な人がいるものである。

幸福はレジャーにあり、レジャーの理想は観想的な生活にある。この流れに沿って、もう一度、「我々は平和に生きようとして戦争をするように、レジャーを求めて働くのである」ということを考えてみよう。

実用的な徳は政治や戦争には大切であるが、しかし、政治や戦争に就いている時には、レジャー

のゆとりはなくなってしまう。世の中に戦争のために戦争を望んだり、たくらんで戦争をしかけたりする人はいない。もしも、戦闘や大虐殺をひきおこすために親しい国を敵にするならば、それは吸血鬼とみなされるであろう。また、政治家の仕事もレジャーとはほど遠い。それは政治に就くことによって、権力や名誉を手に入れるのが狙いなのである。幸福は政治活動とは別のものであるし、我々も明らかに区別してとらえているからである。もしも、徳を示す活動の中で、政治や戦争が、崇高で偉大であったとしても、レジャーとは両立しないし、それはそれ自身で望ましいのではなく、ある目的遂行のための手段として意義があるのである。

ところが、知性に即した生き方はまじめさにおいてのいいであり、まさに contemplation であり、それ以外の目的を持たず、それ自身固有の楽しみをもっているのである。

ここで、楽しみというと、娯楽や気晴らしもレジャーに入るのかという問題が生じてくる。確かに娯楽や気晴らしを、なにかの手段にしようとは思わない。よく世の中で幸福だといわれる人たちが、そうした娯楽、気晴らしを楽しんでいる。僭主の遊び相手が、重用されたりするをみると、娯楽や気晴らしも、幸福の要素だと思われがちだが、それは違う。気高く生きる源である徳や知性は、権力のあるなしとは関係がない。純粋で自由な楽しみを知らない人たちが、肉体的快楽に走ったとしても、それが望ましい楽しみ方だというわけにはいかない。幸福であることが究極の目的であるが、人間は娯楽や気晴らしのために、苦勞をしたり、あくせく働いたりもしない。娯楽や気晴らしは究極の人生の目的にはなりえないからである。

Aristotle は、自由時間の過ごし方について、「ニスマコス倫理学」「政治学」の中で、3つのタイプのあることを述べている。

「一生懸命働くために、アマューズメント (*paidia* パイディア) を求める。それは正しい。アマューズメントは、レクリエーション (*anapausis* アナパウシス) の一形態であって、我々は息抜きもなしに働くことができないからレクリエーション (*anapausis*) を必要とするのである。それゆえに、レクリエーションはそれ自身が目的なのではなく、さらに活動するための手段なのである。幸福な生活とは徳に従った生活と考え

表1 自由時間の過し方の3タイプ

	アリストテレス	ジョブレ・デュマズディエ	渡部昇一
タイプ1	アナパウシス (anapausis) 休息・休養・保養 rest/relaxation recreation	リラクセーション (délassement) 疲労の回復	レクリエーションとしての余暇 労働からくる疲労回復
タイプ2	パイディア (paidia) 気晴し・娯楽 amusement entertainment	エンターテインメント (divertissement) 退屈からの脱出	リリースとしての余暇 労働からくるストレスの解放
タイプ3	スコレー (schole) 真理と自己理解の追求 自己開発 leisure/school contemplation cultivation of mind	セルフ・ディベロプメント (développement de la personnalite) 身体・感情・理性の陶冶	ディスプリンとしての余暇 自己規律を課した 自由時間の過し方

表2 言葉の整理

ギリシャ語	ラテン語	英語	フランス語	日本語
schole	otium	leisure school	développement de la personnalite	→ 修養・自己開発
anapausis	recreatio	recreation	délassement	→ 休息・休養・保養
paidia		amusement entertainment	divertissement	→ 気晴し/娯楽
Aristotleの学園 ↳ (Lukos) Lykeion	Lyceum		lycée	
		(OE) leisere	(OF) leisir	
	licere	leisure	loisir	→ 閑暇/間暇 余暇 { 経済的ゆとり } { 時間的ゆとり }
		(licence)		
theoria	contemplatio	contemplation (theory)		→ 観想
ascholia	negotium	business/work occupation/negotiation		
ponos		labor		→ 骨折り労働
		self-development (de + velop) 開く 封を		→ 自己開発

られる。そのような生活はまじめなものであって、アミューズメントにはない」⁴⁾

「我々は正しいレジャーとはなにかについて自問しなければならぬ。あきらかにアミューズメント (paidia) ではない。もしそうだとすると、ア

ミューズメントが人生の目的になってしまうからである。アミューズメントはむしろビジネスの領域に属している。(というのは、一生懸命働くものにとって、レクリエーションを必要とする。アミューズメントはレクリエーションの一つであっ

て、ビジネスには緊張と骨折りがつきまとうからである)それゆえに、治療上の理由からアミューズメントの必要を求めて、そのタイミングと使い方には注意を払わなければならない。アミューズメントは、心のリラクゼーションとレクリエーションとして楽しむものである。」⁷⁾

Aristotle は、幸福はレジャーにあると考えた人であるから、言葉の使い方には、注意を払っている。しかし、今日、我々はレジャー、レクリエーション、リラクゼーション、アミューズメント、エンターテインメントといった言葉を、あまり厳密に整理しないで用いている。同様のことは、休息、休養、保養、気晴らし、娯楽、遊び、余暇、趣味といった日本語の言葉使いにもみられる。

英語訳、日本語訳を比較してみても、言葉使いに混乱がみられ、Aristotle の真意が伝わっていない。そこで先の訳出には、Aristotle のレジャー論に精通している Grazia に従って、紹介してみた。この「ニコマコス倫理学」「政治学」の引用箇所をみると、Aristotle は自由時間の過ごし方として、3タイプをあげていることがわかる。

タイプ1 アナパウシス (anapausis) 型

疲労の回復としての休息・休養・保養で、英語の rest, relaxation, recreation にあたる。

タイプ2 パイディア (paidia) 型

広義にはレクリエーション、アナパウシスの中に入るが、気分転換、気晴らし、娯楽で、英語の amusement, entertainment にあたる。

タイプ3 スコレー (scholē) 型

真理と自己理解の追求、知性に即した生き方(観想的生活)、自己開発で、英語の leisure, school, contemplation, culture, liberal arts, self-developmet にあたる。

今日、自由時間の過ごし方として、フランスの社会学者 Joffre Dumazedier¹³⁾、わが国では英語学者の渡部昇一²²⁾の3タイプがよく知られているが、興味深いことに、ニュアンスに多少の違いがあるが、大筋において、Aristotle の3タイプに沿っていることである。

leisure の語源については「現代レジャー論(2)」でもふれてきたが、アメリカのレジャー学者 Richard Kraus が Aristotle に関連づけて、次のように説明している。

「leisure という言葉は、古代ギリシアの scholē に由来し、英語の school も scholar もここからき

ている。そして scholē が leisure と education の間の密接な橋渡しをしている。scholē は、直接、leisure の意味を持っていると同時に、また学問的な討論の場をさしていた。そのような場が Apollo 神殿の Lykos の隣の森にあった。そこは後に lyceum として知られるようになった。ここからフランス語の lycee がきており、school を意味するようになった。英語の leisure も、直接にラテン語の licere と関係しているといわれている。licere は『許されている』『自由である』の意味である。licere からフランス語の loisir, そして英語の licence が派生している」¹⁸⁾

Aristotle は門下生たちと、リセウムの庭園をそぞろ歩きしながら、哲学を説いたといわれている。ここから Aristotle 学派のことを、ペリバトス学派(逍遙学派)とよんでいる。逍遙とは俗事を離れて、心を楽しませるということであるが、Aristotle のレジャー観がこの学園生活によくあらわれているように思う。

V. Aristotle のレジャー哲学に学ぶこと

Aristotle のレジャー観をこれまで紹介してきたが、この古典的レジャー観からなにを学ぶべきか。

「日本人は働いている間は安心しておれたが、休日にはいかにレジャー生活を送るかを知らず、仕事の術よりも、大切な術を身につけていなかったために滅んだのである。

日本人のレジャーの失敗の原因として、一般に三つあげられている。第一に、レジャーにあてるべき自由時間を仕事の準備にあててしまったこと。第二に、日本の経済環境が不安定で、学芸、文芸にまで、関心をむけるゆとりがなかったこと。第三に、女性たちが子供の教育にあけくれ、自分自身の自己開発の努力を放棄しあまったこと。」

以上は、今日のわが国のレジャー状況を少々辛くとらえたものであるが、この状況のスケッチは、Aristotle のスパルタ人についての記述をモデルにし、スパルタ人を日本人に、戦争を仕事に置き換えたものである。もし、Aristotle が今日の時代に生き返り、わが国社会と日本人の生き方をみたならば、このようにとらえるのではないだろうか。

これは、日本だけではなく、欧米においてもよくみられることであるが、「レジャーは個人の問題であるから教育行政はできるだけ関与しない方が

よい」という意見がある。これは、自由時間を自己開発として、scholēとして過ごす能力を身につけている場合はその通りであるが、そうでない場合には問題である。現代レジャーのあり方を問い続けてきた Grazia は、Aristotle のレジャー観から学ぶべきこととして、次のような視点をあげている。

「我々はレジャーがいかに政治と関係しているかを理解しつつある。もしも、国民が自由とレジャーを求めるならば、国家は国民にレジャーを与えなければならない。国民がレジャーに求めているものは、我々が今日、よき生活とよぶところのものである。しかし、驚くべきことに、政治、哲学者で、国家の目的に自由とレジャーを関連させて、とらえている人はほとんどいない。現代においては、労働中心の考え方が普及して、自由としてのレジャーの考え方がなくなっている。しかしアリストテレスは、レジャーを大切にされた生活が、ギリシア人にとって、唯一の幸福な生活であると、とらえていたのである。」²⁰⁾

Aristotle の政治学、倫理学は、平和時の政治のあり方、人間の生き方を扱ったものである。こうみることもできるのではないだろうか。Aristotle は、教育、行政は、レジャーに対ししっかりした理念を持ち、積極的に関与すべきであると、とらえているのである。

今日の日本の場合をみても、人生80年時代に対応する生活哲学がまだデザインされていない。人生50年時代の生活哲学は「勤勉—節約」の哲学でよかったけれども、人生80年、その3割が自由時間ということになると、この自由時間を幸福に生きるレジャー哲学が必要になってくる。その時に Aristotle は、第一級の道案内人になるとみてもよいのではなかろうか。

それにしても、労働時間短縮の歴史は、レジャーの歴史でもあったわけだが、私達人間は、「労働とはなにか」「労働とはいかにあるべきか」の問題にこだわり過ぎてきたのではないだろうか。自由時間に対するものの見方、考え方、感受性を豊かにすることなく、また、レジャーのライフスタイルを身につけることなく、よくもここまで労働時間を短縮し、自由時間を増やしてきたものだと思う。

臨教審以降、「レジャーとはなにか」「レジャーはいかにあるべきか」に関心が高まり、生涯学習、生涯学習社会に対する関心が高まってきている。

この機運を一過性で終わらせないためには、なによりもレジャーに対するものの見方、考え方、感受性を Aristotle のようなレジャー観に沿いながら豊かにすることではないかと思う。

注

- 注1) 原典では次のように記されている。
 なおギリシア語のあとのローマ字はギリシア語の読み方を示してある。
παρὰ τὴν πρᾶξιν. δοκεῖ τε ἡ εὐδαιμονία ἐν τῇ σχολῇ εἶναι. ἂ σχολοῦμεθα γὰρ ἵνα σχολάζωμεν, καὶ πολεμοῦμεν ἢ ἐ ἰρήνην ἀγωμεν. τῶν μὲν οὖν πρακτικῶν
 docei te hē eudaimonia en tē scholēinai. ascholūmetha gar hina scholazōmen kai polemūmen hin eirēnēnagōmen.
- 注2) 原典では次のように記されている。
 なおギリシア語のあとのローマ字はギリシア語の読み方を示してある。
διήρηται δὲ καὶ τὰς ὀβίος εἰς ἀσχολίαν καὶ εἰς σχολὴν καὶ πόλεμον καὶ εἰρήνην, καὶ τῶν πρακτῶν τὰ μὲν εἰς τὰ ἀναγκαῖα καὶ χρήσιμα τὰ δὲ εἰς τὰ καλὰ. περὶ ὧν ἀνάγκη τὴν ἀπὸ τῆν αἰρεσιν εἶναι καὶ τοῖς τῆς ψυχῆς μέρεσι καὶ ταῖς πράξεσιν ἀπὸ τῶν, πόλεμον μὲν ἐ ἰρήνης χάριν, ἀσχολίαν δὲ σχολῆς. τὰ δ' ἀναγκαῖα καὶ χρήσιμα τῶν καλῶν ἐνεκεν.
 diērēntai de kai pās ho bios eis ascholiān kai eis scholēn kai polemon kai eirēnēn, kai tōn practōn ta men eis ta anancaia kai chrēsima ta de eis ta kala. peri hōn anancē tēn autēn hairesin einai kai tois tēs psychēs meresi kai tais pracsēs in autōn, polemon men eirēnēs charin, ascholiān de scholēs, ta d'anancaia kai chrēsima ton calōn henecen.
- 注3) 梅根は自ら創立した「第一回和光大学入学式における学長告辞」の中で、学生諸君に大学の起源について、学術的な研究成果を背景におきながら、スピーチを展開しているが、その中でレジャーを退廃的な逸楽の意味と受け取れる発言をしている。leisure が scholē と関係していることをここではふれていない。「ある教育者の還暦」 p. 96, 誠文堂新光社。1966 (非売品)
- 注4) 本節は、アリストテレスの「政治学」の1333a から以降をレジャー論の立場から筆者が要約したものである。なお、本節は「学習社会に向けてのレジャー教育(上) —アリストテレスのレジャー哲学—」『ロアジール』余暇開発セン

ター, 1988. 5. に初出のものを推敲, 加筆した。

注5) 本節は, アリストテレスの「ニコマコス倫理学」の1176a から以降をレジャー論の立場から筆者が要約したものである。なお, 本節は「学習社会に向けてのレジャー教育(下) - アリストテレスのレジャー哲学 -」『ロアジール』余暇開発センター, 1988. 6. に初出のものを推敲, 加筆した。

{本文中の Aristotle のギリシア語については, 佐藤臣彦氏の協力のもとに, 英語訳とのつき合わせを行なうことができた。心から感謝申しあげたい。}

引用・参考文献

- 1) Aristotle (J.A.K. Thomson): Ethics. 1177a25-b13, Penguin Classics, 1980
- 2) Aristotle (Rackham, H): Nicomachean Ethics. 1177a25-b13, Heinemann-Harvard, 1926
- 3) Aristotle (Rackham, H): Nicomachean Ethics. Heinemann-Harvard, 1926
- 4) Aristotle (Rackham, H): Nicomachean Ethics. 1176b, Heinemann-Harvard, 1926
- 5) Aristotle (Rackham, H): Politics. Heinemann-Harvard, 1932.
- 6) Aristotle (Rackham, H): Politics. Heinemann-Harvard, 1932.
- 7) Aristotle (Rackham, H): Politics. 1137b, Heinemann-Harvard, 1932.
- 8) アリストテレス (高田三郎訳): ニコマコス倫理学. 1177a251, 岩波文庫, 1980
- 9) アリストテレス(山本光雄訳): 政治学 岩波文庫
- 10) 石山脩平: 古代ギリシア教育史, pp. 585-586, 日本図書, 1978.
- 11) 石山脩平: 西洋近代教育史, pp. 7-8, 有斐閣, 1952
- 12) James F Murphy: Concepts of Leisure-Philosophical Implications. Prentice-Hall, 1974.
- 13) ジョフレ・デュマズディエ (中島巖訳): 余暇文明に向かって. pp. 17-19, 東京創芸新社, 1972.
- 14) Josef Pieper: Leisure-The Basis of Culture with an Introduction by T.S. ELIOT. MENTOR OMEGA BOOK, 1963.
- 15) Josef Pieper: Leisure-The Basis of Culture with an Introduction by T.S. ELIOT. p. 21, MENTOR OMEGA BOOK, 1963.
- 16) Josef Pieper: Leisure-The Basis of Culture with an Introduction by T.S. ELIOT. p. 20, MENTOR OMEGA BOOK, 1963.
- 17) 松田義幸編: 「ゆとり」について - ヨゼフ・ピーパーのレジャー哲学をめぐって -, 誠文堂新光社, 1987.
- 18) Richard Kraus: Recreation and Leisure in Modern Society. p. 253, Appleton Century Crofts, 1971.
- 19) Sebastian De grazia: Of Time, Work and Leisure. The Twentieth Century Fund, 1963.
- 20) Sebastian De grazia: Of Time, Work and Leisure. The Twentieth Century Fund, 1963.
- 21) 梅根悟: 世界教育史, p. 95, 新評論版, 1967.
- 22) 渡部昇一: 知的対応の時代, 講談社, 1979.